

没後100年 加藤雪窓 —酒田人に愛された天才画家—

開催期間:平成30年11月23日(金)～平成31年2月11日(月)

展示資料目録(展示順)

	作品・資料名	制作・撮影年	形状など	所蔵・提供
1	訪隠者(林和靖帰廬図)	明治32年頃	軸装・絹本着色	個人蔵
2	岩戸別命尊像		軸装・絹本着色	酒田市立資料館
3	三浦屋旅館(写真)	明治41年撮影		(公財)本間美術館
4	青年期の雪窓(写真)			個人蔵
5	訪隠者 褒状二等 賞状	明治32年		個人蔵
6	韓信忍耐之図		軸装・紙本着色	酒田市立資料館
7	寒山拾得図		軸装・絹本墨画淡彩	個人蔵
8	金蓮帰院図 下絵	明治37年頃	軸装・紙本墨画	個人蔵
9	臨写 阿弥陀三尊来迎図		三幅対・軸装・紙本着色	個人蔵
10	金蓮帰院図 第一等賞 賞状	明治37年		個人蔵
11	朝顔図扇面		扇面・紙本淡彩	個人蔵
12	達磨図扇面		扇面・紙本墨画淡彩	個人蔵
13	雪窓が彫った皿			個人蔵
14	酒田山王祭行列図 下絵		紙本墨画	個人蔵
15	酒田山王祭行列図(画像)	明治26年作	三巻対・画卷	本間家日本邸
16	スケッチブック			個人蔵
17	雪窓から伊藤四郎右衛門に宛てた絵葉書	明治39～41年	墨画淡彩	個人蔵
18	山水画卷	明治34年	画卷・紙本着色	個人蔵
19	下絵やスケッチ			個人蔵
20	天井画 竜図(写真)	大正2年作	天井画・墨画	泉流寺(由利本荘市)
21	寒山指月之図		軸装・紙本墨画	個人蔵
22	山影漁舟図		軸装・紙本墨画淡彩	酒田市立資料館
23	扇面 漁舟 竹内淇州賛		軸装・紙本墨画淡彩	酒田市立資料館
24	楼閣山水図		軸装・紙本墨画淡彩	個人蔵
25	幽霊之図	明治30年	軸装・絹本着色	個人蔵
26	荘内文学会員(写真)	明治33年撮影		個人蔵
27	荘内文学 第1集～12集(合本)	明治32～33年		酒田市立光丘文庫
28	尚友帖	明治38～大正7年		酒田市立光丘文庫
29	雪窓が使用した印章			個人蔵
30	山水図 紫石賛	明治45年か	軸装・紙本墨画	個人蔵
31	観音図 紫石賛	明治37年以降	軸装・紙本墨画	個人蔵
32	臨写 観音図	明治39年か	軸装・紙本着色	個人蔵
33	旅僧		軸装・紙本墨画	個人蔵
34	紫石禅師からの手紙	明治35年頃～ 大正3年		個人蔵
35	山水画帖		画帖・紙本着色	個人蔵
36	田家早春図		軸装・紙本墨画淡彩	個人蔵
37	保津川雨中曳舟図		軸装・紙本墨画淡彩	酒田市立資料館
38	虎溪三笑図	大正2年	軸装・紙本着色	個人蔵
39	農家収穫之図(田園帰馬)		軸装・紙本墨画淡彩	個人蔵
40	小松又三郎 肖像画	大正7年	軸装・紙本着色	個人蔵
41	絶絃詩(印刷物)			個人蔵
42	加藤雪窓画伯遺作展覧会チラシ	昭和8年		個人蔵
43	加藤雪窓画伯建碑記念絵葉書	昭和9年		酒田市立資料館
44	雪窓画伯碑(写真)	平成30年撮影		酒田市立資料館
45	雪中鹿図屏風		二曲一隻・紙本墨画淡彩	酒田市立資料館

加藤雪窓について【生没年:明治5年(1872)~大正7年(1918)】

遊歴の少年時代を経て酒田へ

雪窓は代々久保田藩主・佐竹氏に仕えた武家・加藤家の12代目として誕生した。雪窓は幼いころに両親と死別し、祖父から育てられた。祖父も父も漢学を得意とし、雪窓も幼少から漢学、書、絵を学んだ。

雪窓が9、10歳の頃、雪窓に絵の才能を見出した祖父は、秋田の屋敷を処分して、雪窓を連れ、師を探す旅に出た。途中酒田にも滞在し、三浦屋旅館に泊まっている。およそ7年かけて、東北、関東を旅したが、目的を果たすことはできなかったようだ。旅を終えると、理由は不明だが酒田に定住し、秋田に残っていた祖母も呼び寄せた。

明治24年(1891)18歳の時に祖父が亡くなり、翌年正傳寺の住職の長女・千代勢と結婚した。

明治26年(1893)、酒田の豪商たちから依頼され、山王祭の山車行列を描いた懸額(下日枝神社蔵)と、絵巻物3巻(本間家蔵)を制作した。これらの作品は、20歳当時既に高い画力を持っていたことが見て取れる大作で、酒田の人々も雪窓の腕を認めていたと思われる。

明治29年(1896)、雪窓はいっそう画力を磨くため単身上京した。上京にかかる資金は、雪窓の才能に期待した有志が援助している。

中央画壇での活躍

上京した雪窓は、日本画革新の大家・橋本雅邦から、内弟子として入門することを許された。入門当時、雅邦は東京美術学校日本画主任教授だった。また、雅邦門下には菱田春草をはじめ、横山大観、下村観山、川合玉堂など現在よく知られる画家たちが名を連ねている。

雅邦のもとで腕を磨いた雪窓は、次々に展覧会に出品して受賞を重ね、中央画壇でも通用する傑出した画力を持つ逸材として活躍した。出品された作品のなかでも「釣艇夕照図」「擔薪読書図」は、東宮殿下と宮内省のお買い上げとなる栄誉を賜った。

上京中の酒田の人々との関わり

雪窓は東京で絵を学んでいた時期も、酒田の仲間たちと文化活動を続けていた。

明治32年(1899)、佐藤良次、最上谷直吉らと荘内文学会を創立し、『荘内文学』を12集まで発行した。明治38年(1905)には、須田古龍、佐藤良次、竹内淇州らと共に書画の鑑賞会「尚友会」を創立した。

酒田の友人たちとは、旅行にもたびたび出かけており、明治34年(1901)には南紀・山陽・九州を、明治40年頃(1907)には平泉など東北の史跡を巡っている。

- 須田古龍…漢詩人で、門下には竹内淇州、佐藤良次、最上谷直吉などがいる。雪窓の没後、海向寺に建てられた雪窓画伯碑の撰文を行った。
- 佐藤良次…酒田新聞の主筆で、郷土史家であり、町会議員としても活躍した。明治27年(1894)の酒田大地震の時は、安祥寺の下敷きになった雪窓を助け出した。
- 最上谷直吉…漢詩と書道を得意とした。町会議員、市会議員、県会議員を務めた。
- 竹内淇州…書、漢詩、将棋、剣道など多くの趣味を極めた素封家で、町会議員としても活躍した。雪窓画伯碑の書を手がけた。

紫石禅師との交わり

明治34年(1901)、禅宗の一派・黄檗宗の大道場である広寿山福聚寺(福岡県北九州市)を訪れた雪窓は、紫石禅師に出会う。紫石禅師は後に黄檗宗の管長(宗派の長)になった人物で、書画を得意とした。2人はこれ以降も交流を深め、雪窓は紫石禅師から書を習い、紫石禅師は雪窓から絵を習ったという。

酒田に戻った晩年

雪窓は明治40年頃(1907)、酒田に戻った。戻った理由は明らかになっていないが、展覧会に出品した作品2点が落選したためとも言われる。戻った雪窓は、今町観音小路に住み、画業に取り組んだ。晩年も、友人たちと北海道や九州を旅行している。

大正5年(1916)、長年闘病していた妻・千代勢が亡くなる。その2年後の大正7年(1918)、雪窓は猩紅熱にかかり、突然亡くなった。菩提寺は徳念寺で、祖父・主鈴のそばに葬られた。